大学と市は運命共同体

吉備国際大学の地域連携活動　留学生も地域に出る

井勝副学長に聞く

吉備国際大学（社会科学部、（保健医療福祉学部、心理学部）※来年度から、看護学部と人間科学部に再編、アニメーション文化学部、農学部、外国語学部）は、1990年に高梁市からの要請受け、公私協力方式により開学した。以来、地域連携に力を入れてきた。また、国際大学として中国、韓国、カンボジア、インドネシア、ベトナム、スリランカ、ネパールなどから留学生を受け入れ、地域の国際化にも貢献している。井勝久喜副学長（研究担当・社会貢献担当）に取り組みを聞いた。

○3つのキャンパスで地域連携

吉備国際大学は1990年、高梁市からの強い要請を受け公私協力方式で開学した。2013年には南あわじ市の要請で地域創成農学部（現・農学部）、2014年には岡山市に外国語学部を開設。このような経緯があり、開学時から地域連携・地域貢献は大学の使命となっている。「設置以来、地域資源を活かした教育を行おう、地域で実践的な研究を行おう、と号令をかけてきました」と井勝副学長は振り返る。

3つのキャンパスには地域連携センターが設置され、ここが取り組みを推進するとともに、3つの地域連携センターの情報や課題の共有を行うために全学組織の「地域貢献推進センター」を設置している。

各学部の特色と専門性をもって地域活動は展開されるが、学生は、正課（1年次必修科目の「課題解決演習」など）と、正課外（各ゼミによる地域連携活動や学生達が自主的に企画するボランティア活動など）の関わり方がある。例えば、経済的困窮家庭に食品を配布する「順正デリシャスフードキッズクラブ事業」、獣害対策としての「ジビエ（イノシシ・シカ）商品化活動」、高齢者施設での「園芸療法」、大学女子サッカーチーム「吉備国際大学Charme岡山高梁（なでしこ2部）の地域活動」、高梁警察署からの依頼による「特殊詐欺防止TVCM制作」や高校生を対象とした「英語スピーチコンテスト」などがあり、正課・正課外を合わせると、年間100を超える地域活動数となる。

○西日本豪雨では復旧ボランティアも

これまでの取り組みをきっかけとして、学生と地域住民との繋がりが生まれている。この関係性が学生のボランティア活動や、市民から「祭りや清掃活動に協力をしてほしい」、「留学生に来てもらい異文化交流をしたい」といった要請に応えることに繋がる。

「2018年7月の西日本豪雨では、仲良くなった近所の知り合いが心配で、災害ボランティアセンターが立ち上がる前から自主的に復旧作業に協力する学生もいました。普段から市民の皆さんと密接な付き合いがあってこその行動だと思います」。

このとき、高梁川が増水したため、市民やボランティアに大学施設を開放している。こういった経緯もあり後に、災害時における高梁警察署災害警備本部の代替施設として同キャンパスを使用する協定を締結している。

コロナ禍では、高梁市との協力体制のもと、地域医療福祉センターを会場として、ワクチンの集団接種を学生・教職員のみならず、自治体職員、市民、市内企業従業員に行った。その際には本学所属の医師、看護師だけでなく看護学科の学生、技能実習生の通訳を担当した留学生、事務職員が接種に協力した。

また、280人を超える留学生たちも積極的に地域に出ていく。「国内には「外国人にはアパートの部屋を貸さない」といった地域もある中で、高梁市民は留学生を積極的に受け入れてくれます。逆に留学生も地域の方々に喜んでもらえればと、地域のお祭りなどで自国の料理を振舞ったり神輿を担いだりと、様々な活動に参加します。このような地域社会の中での経験は学生の成長に繋がるものであり、本学の学生は地域の人たちに育てられています」と井勝副学長は述べる。

井勝久喜副学長

○地（知）の拠点整備事業や私立大学研究ブランディング事業に採択

大学の各研究所・センターも、地域連携・地域貢献に積極的に取り組む。高梁キャンパスには、保健福祉研究所（1999年）、ボランティアセンター（2001年）、心理・発達総合研究センター（2003年）、文化財の修復などを行う文化財総合研究センター（2003年）、スキルラボ、フィットネスラボ等を擁する地域医療福祉センター（2015年）、南あわじ志知キャンパスには植物クリニックセンター（2013年）が設置されており、それぞれが継続的に活動を行っている。

「開学当初から、地域の皆様から、「大学生に地域の活動に参加して欲しい、若者の話を聞きたい」という要望がありました。地域の活性化にも関わるので、市側も連携には非常に熱心です。私は現在、高梁市総合政策審議会の委員長を務めていますが、高梁市は「健幸都市　たかはし」という都市像を掲げ、身体の健康だけでなく、生きがいを感じ、心豊かで幸せに暮らせるまちづくりを目指しています。大学も都市像実現に向けて、地域と連携を図っているところです」と井勝副学長は述べる。

教員の取り組みから自治体・団体などとの連携協定に繋がるケースも多く、現在の地域連携関連の協定数は30を超える。地域の大学として、教員の自治体行政委員への就任依頼も多く、教員も積極的に協力している。

南あわじ市にある農学部は、市が設置する「南あわじ市大学連携推進協議会」と連携を図り、4つの研究会を立ち上げている。「農学部は産学官連携の共同研究や商品開発に繋がりやすく、地元農家からも大きな期待を寄せられています。これまでに産学連携ブランドの白ワインや日本酒の商品化にも繋がっています」と井勝副学長は述べる。

地域連携・地域貢献の取り組みの成果として、2013年には文部科学省「地（知）の拠点整備事業」に採択された。また、2017年には「私立大学研究ブランディング事業」にも採択されるなど、地域との組織的かつ継続的な関係が評価されているといえる。

「3つのキャンパスは離れていますが、これからもそれぞれの良い部分を取り込みながら、一体的な地域活動を展開したい」と井勝副学長は展望する。

○大学と地域は運命共同体

もちろん社会環境は明るくはない。「高梁市の昨年度の出生数は80人台。県内でも少子高齢化が進んでいる地域です。人口ピラミッドを見ると18歳～22歳は、本学の学生が在住していることもあり、少し増加しています。このように学生の存在は市にも大きな影響を与えていることを、市民の皆様によく理解いただいています。近藤隆則高梁市長は常々「大学と市は運命共同体」と言っており、講義の講師を務めていただいたり、学生に感謝状を贈ってもらったりしています。様々な取り組みを行う中で、市の各課職員とは気軽に相談できる関係性が築けており、大学連携室も設置されています。我々も「市の発展なくして大学の存続はあり得ない」という認識です」と井勝副学長は想いを語る。

「大学と地域は運命共同体」という言葉は、強い危機感の表れと言えるだろう。吉備国際大学は、地域とともに生きる大学として、地域連携・地域貢献活動をこれからも熱心に行っていく。